

保 育

5歳児から受ける影響を生かす教師のかかわりとは

— 4歳児の製作活動を通して —

掛 志 穂

1 はじめに

本園では人とのかかわりを大切にしており、生活の中で3歳児・4歳児・5歳児と一緒に遊んだり過ごしたりすることはよくある。その中で子どもたちは互いに影響を受け合いながら成長している。そのような中で、4歳児の遊びを見ていると、ラップの芯やトイレットペーパーの芯で剣を作ったりままごとで泥団子を作ったりと、毎日作って遊ぶことを繰り返している。繰り返す中で発見していくこともあるのだが、なかなかそのきっかけがつかめず、同じことの繰り返しに飽きてしまって他の遊びに向かう姿もある。教師としてももう少し4歳児の遊びが深まってほしいと願っている。幼稚園教育要領解説では「幼児なりの物とのかかわりを十分に楽しむことが大切であるが、ときには、他の幼児が工夫していることに注目するよう促したり、教師自らが工夫の仕方を示したりするなど、いろいろな物に興味をもってかかわる機会をつくることも必要である」¹⁾と言っている。そこで、他の幼児が工夫していることに注目するという捉えを捉えて、4歳児が5歳児とかかわることで5歳児から影響を受け、その影響により4歳児の遊びが深まるきっかけになるのではないかと考えた。

本園の中で4歳児が5歳児の影響を受ける場面を考えてみる。5歳児の影響を受けやすいものとして、次のような活動がある。うさぎの飼育当番、片付けパトロール、3歳児の世話、誕生会の椅子の準備や片付けなどである。これらは、普段の生活の中で見て学び、5歳児になったら自分たちがする役割という感覚で4歳児に受け入れられてい

くように感じる。また、お店屋さんごっこやお化け屋敷や鬼ごっこなどは、4歳児も一緒に関わることができる遊びなので、遊びのやり方や人間関係のやりとりまでも、見よう見まねで自分たちの遊びや生活に取り入れやすいと考える。反対に、5歳児の影響を受けにくいものとして、クラス単体で行う製作活動がある。これは5歳児だけで行う活動のため影響を受けにくいのである。そこでの遊び方や素材の使い方、道具の扱い方、友だちとのやりとりなどは4歳児からの積み上げの上に成り立っていて、個人差はあるが4歳児より少し難しいことに挑戦していたり丁寧であったり粘り強かったりするのである。そういう5歳児からの影響を受けることは、4歳児にとっていい刺激になり遊びが深まるきっかけになると考える。

2 研究の目的

先に述べたように、5歳児からの影響には受けやすいものと受けにくいものがある。4歳児の遊びが深まるためにはどちらも必要であると考え。遊びの中で影響を受けやすい「一緒にかかわることができる遊び」は今まで通り行っていく。しかし、今回は5歳児の影響を受けにくい「クラスでの製作活動」に視点をおいてみたい。4歳児より少し上をいく姿に触れることで、4歳児の遊びが深まるきっかけが増えるのではないかと考えるからである。そのときに放っておいてはせっかくの遊びを深めるきっかけがなくなってしまう可能性がある。そこで本研究では、4歳児の遊びを深めるために、5歳児からの影響を生かす教師のかかわりを探ることを目的とする。

3 研究の方法

(1) 対象児

年中組4歳児33名（男児18名 女児15名）

(2) 期間・場面

平成27年11月～12月

好きな遊びをしている場面

(3) 方法

- ①5歳児の「車づくりから街づくり」の活動後に4歳児がかかわる機会を作る。
- ②かかわれている時とその後の子どもたちの様子をエピソードや写真で記録する。
- ③②から教師のかかわりや環境構成により4歳児がどのような影響を受けたかを明らかにする。
- ④かかわった後の4歳児の姿から、教師のかかわりは5歳児からの影響を生かすかかわりであったかどうかを考察する。

4 実践事例（4歳児）

実践例1「5歳児が作った車やコースを見る」

（11月）

<背景>

5歳児がペットボトルや空き箱を使って車を作り、保育室いっぱいには街や線路などを作っている。廊下を通るたびに4歳児は「うわあ、何かすごいのがあるね」と気にしながら通っている。そこで4歳児担任は5歳児に会うたびに「面白そうじゃねえ、中で遊びたいなあ」と声をかけていた。数日たって、A児（5歳児）が4歳児を誘いに来た。

A児が「先生、さくら（年中）組さん車作ったら来てもええよ」と言いにくる。近くにいたB児（4歳児）は「早く車作らなくっちゃ。先生手伝って」と言う。B児と一緒に車を作り、廊下に出て近くにいたC児D児E児（4歳児）に「きく組さん（年長組）の部屋に車走らせに行くんだけど行く？」と聞くと「行く行く！」と嬉しそうに言い車を持ってついてくる。年長組の前になると、4歳児たちの足が一瞬止まる。中に入るのを躊躇し

ているようだ。教師と一緒に恐る恐る「入ってもいいですか？」と言う4歳児。中にいるA児を含む5歳児から「いいよ」と返事が返ってくる。そこで、「ちょっと見せてねえ。すごいねえ」と言いながら見て歩く。

E児は「ねえ、A君、これなに？」と聞く。「これがガソリンスタンドとガソリン入れるホース」「これは電車でこれ踏切」「ここが警察」と次々に説明をする。「この白い線なに？」と誰かが聞くと「これは道路の真ん中にあるやつ」とA児。4歳児たちはコースの細かさやいろいろな部品がついている車のかっこよさに驚きながら、よく見ている。B児は作った車を走らせてみる。タイヤの竹ひごを段ボールの溝に入れているが、溝が詰まっていたタイヤが回らない。それを見てA児が「タイヤは回るようにせんと」と言って自分が作った車の裏を見せる。ストローと竹ひごとキャップが使われている。B児は少々困った顔をする。ストローは穴がつぶれていないのでタイヤがよく回る。「Bちゃんはいいの、これで」と言って車につけたひもを引っ張って動かすB児。にっこりしながら引っ張っているが、教師には何か気になる表情にも見える。

保育室に戻ったとき、教師が「お兄ちゃんみたいな転がるのがいい？」と聞くと「うん」と答えるB児。「やはりそうだったのか」と思い、教師がB児のタイヤをつつきながら「何で回らんのかねえ」と言う。B児は穴がつぶれていることが原因だと思っていない様子である。「お兄ちゃんのここ（裏側）、何がついてた？」と聞くと「ストロー」と答える。「ストローだったらくるくる回るねえ。Bちゃんの、くるくる回る？」と聞くと「回らない」と答える。「ここ（段ボールの穴）がくるくる回るの見つける？」と誘うと、B児は素材箱から段ボールの穴がつぶれていないものを探し始める。そこにたけひごを通してタイヤが動く車を作る。B児は床で転がす。スムーズに車は動く。二人で嬉しくなり「この坂道は？」と教師が誘う。B児は「うん！」と言ってゆっくり車を坂の上に置いて手を離す。さーっと車が転がって

いく。B児は目を丸くして「行った！」と喜んでいる。



図1 5歳児の街で遊ぶ4歳児

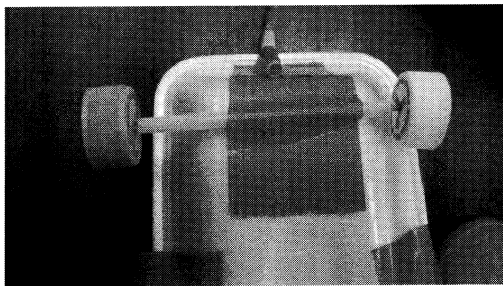


図2 5歳児のタイヤのつけ方

【考察】

教師が5歳児に声をかけ続けたことがきっかけとなり、5歳児が4歳児を誘う姿が見られた。しかし、年下から年上に声をかけることは勇気がいることである。そのとき教師は、子どもたちと一緒に「中に入ってもいいですか」と言い、「ちょっと見せてねえ。すごいねえ」と明るく5歳児とかかわりながら雰囲気や和らげようとしている。このことから、かかわるきっかけを作るためには、4歳児が勇気を出せるように教師と一緒にかかわることが大事であると考えられる。

また、C児、D児、E児は街の中に細かい建物や物があることに感動してよく見ている。E児は5歳児に物怖じもせずどんどん話しかけて行く姿から、かなり影響を受けていると捉えられる。

B児はA児から「タイヤは回るようにせんと」と言われ、初めはあきらめたように「これでいい」とつぶやねるが、自分の保育室に戻ってから本当はタイヤの回る車を作りたいことを教師に伝える。A児の言葉を受けて「作りたい」という思いをもち、そこに教師と一緒に考えながら思いを実現で

きるようにかかわることで、タイヤの回る車を作ることができた。このことから、5歳児の影響を受けて4歳児が思いをもち、その思いを実現させるためには、4歳児の思いをくみとり一緒にかかわる教師の存在が必要であると考えられる。

実践例2「ガードレールがいる」(11月)

<背景>

数日後、5歳児が積み木の部屋で車が走るコースを大型積み木で作って遊んでいると聞き、朝元気がなかったF児を気分転換に誘って一緒に行ってみた。

F児と教師と一緒に「入っていいですか？」と聞く。A児とG児(5歳児)は「いいよ」と言って遊んでいる。F児の目の前には大きな積み木のコースができていて、F児の胸の高さくらいのところに大きな板を斜めにした坂道がある。教師が持っていたドングリを転がしてみる。どうしても途中で落ちてしまう。それを見たA児が「ガードレールがいる」と言って小さい積み木を板のほとりに3個並べる。なぜかその上をドングリを転がすのでドングリは落ちる。A児は「あー！」と叫びながら数回ドングリを転がして落とすのを繰り返す。それを見てG児が「なにしょうるん」と大笑いをする。そのやりとりを見てだんだんF児が笑顔になってくる。次にA児は、自分の長い車を半分に折って山のようにし、トンネルに見立ててドングリを通して遊び始める。それを見てF児も自分のドングリを転がすが途中で落ちてしまう。G児がF児のドングリが落ちないように小さい積み木をたくさん持ってきてガードレールを作ってくれる。F児がドングリを転がすとガードレールにぶつかりながら最後の方までコロコロ転がった。G児が「やった！」と喜ぶ。F児も「いった！」と喜ぶ。教師が「お兄ちゃんたちガードレール作ってくれたね。よかったねえ」と5歳児のやさしさとガードレールのことがF児の心

に残るように言葉にする。

後日、4歳児だけで積み木の部屋で遊んでいる時のこと。車を走らせているとどうしても板の途中から車が落ちる。「あー」と残念そうに言うF児とH児たち。そこで教師が「F君、そういえばお兄ちゃんたち何かしてなかったっけ？」とそうっと言うとF児は「あっ！そうだった。ガードレール！」と言ってとても嬉しそうに板のほとりに細長い積み木を置き始める。他の子どもたちも真似て同じように置き始める。車をまっすぐ転がすと最後まで行った。「おー！」とF児とH児たちが言う。次に転がすと車が斜めになって止まってしまう。4歳児が作った車は5歳児の車を真似て飾りをつけたり幅が広かったりしていて、ガードレールをつけた狭い坂道では通りにくいようである。「もう、行かんじゃん」とH児が言う。結局、ガードレールをとって車を転がして遊んでいる。



図3 4歳児のガードレール

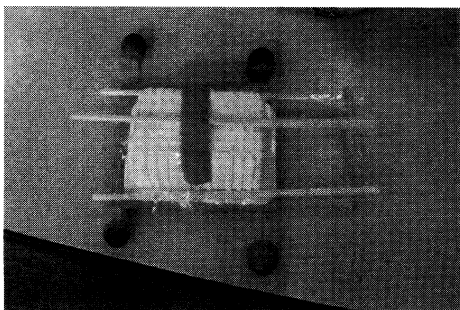


図4 幅の広い4歳児の車

【考察】

朝から元気のなかったF児だが、担任が持って行ったドングリで楽しそうに遊ぶ5歳児たちを見

て気分転換になったのか、元気が出てきて一緒に遊ぶ姿が見られた。5歳児たちも年下ということがあったのか、ガードレールを作ってくれたり一緒に喜んだりとF児と一緒に楽しむ姿が見られた。このことから、F児の気分転換に5歳児とのきっかけを作ったことは、F児にとって安定できることにつながったと考える。

また、ドングリがコースからはみ出て転がってしまうことからガードレールを作る5歳児の姿を見て、F児自身も教師もガードレールのことを心に留めるように言葉にした。それにより、後に4歳児で遊んでいて困った時、F児がガードレールのことを思い出せるよう教師が言葉をかけた。実際、5歳児を真似てガードレールを作ってみて一回は成功したが、あとはなかなかうまくいかなかったことから、自分たちの車のコースには必要ないと判断している。しかし、ガードレールというものがあるということや車が通るには幅を考慮することが必要だということ、その場で一緒に遊んでいたH児たちは体感していると考えられる。また、このときの4歳児たちは、あえてガードレールをとって遊んでいる姿から、車が落ちることも楽しんでいるのではないかと捉えられる。これらのことから、5歳児の姿を思い出すために意識して言葉にすることは必要であるとともに、ガードレールを作って他の子どもたちにその体験を広げたように、まずはやってみることや、その時の子どもたちが何を楽しんでいるのかを見取ることも大事であると考えられる。

実践例3「これガソリンスタンド」（12月）

<背景>

5歳児担任と連携をとり、5歳保育室の街に4歳中児が出入りできるようにお願いした。また、5歳児にも4歳児が行ったら見せてね、などと話をしていた。そのため、年中組のほとんどの子は年長児の街にふれている。年長組に街がなくなった後ぐらいのことである。年中組の保育室にボールで車を転がす道路をI児が作りはじめ、そこに

数人が一緒に加わっている。

I児が高さの工夫をしながら車が転がる台（道路）を作っている。そこにJ児やK児がやってきて「なにしょうるん」と聞く。I児は「車転がすのつくりようるんよ」と言うと「俺もやる！」と2人が答える。不安定な道路でそのほとりにティッシュの箱をいくつもくっつけているので重さで傾く。「これなあに？」と教師がそのティッシュの箱のことを聞くと「ガソリンスタンド」とJ児が答える。K児はストローに黄色いセロハンを巻いている。信号かと思い「それなあに？」と聞くと「電気」と答えるK児。いつの間にか人数が増え、いつの間にかガムテープが貼られている。「このテープなあに？」と聞くと「道路の真ん中の白いやつ」と言う子どもたち。センターラインということを共有しているようである。次第にK児が周りに青いビニールをくっつけ「これ海」と言うとI児が「船、作ろう」と言う。



図5 4歳児のガードレールとセンターライン

【考察】

5歳児の保育室で見たガソリンスタンドやセンターラインなどがここに生きてきている。ガソリンスタンドはガードレールの役目もしている。4歳児の子どもたちの中に共通のイメージがあるようである。これは、年長組の街を見せてもらっているためと考えられる。教師は子どもたちのイメージを聞き出し、共感して認めていくことを繰り返している。そのことで、子どもたちは自信をもって活動を続けていると捉える。

実践例4「A児にみてもらう」（12月）

<背景>

事例3の車を転がす道路を作っている時、年長のA児がやってきた。

「これ何？」とA児が年中の保育室に入ってきて聞く。4歳児は夢中で作っていてA児の声が聞こえていない様子である。そこで、教師が「きく組みたいな道路だよ」と答える。するとA児は「ふーん」と答えながら「ここに駐車場があったらいいのに。エレベーターみたいにぐいーんって上がるやつ。ゴムで」と言う。教師はイメージがわきにくかったので「さくら組の子に教えてあげて」と伝える。すると、A児は近くにいた4歳児に言うが難しいのか相手にされていない。A児はそのまま年中組で車を作り始める。そこで教師は何を作ろうかと考えていたL児に「A君がこんなにしたらいいんじゃない？って言ってただけだなあ」と伝える。するとL児は「あ、いいこと考えた！」と言って楽しそうに作り始める。L児の駐車場ができあがると、A児がやってきて「これどうやってやるん」とL児に聞く。するとL児は「このひもをぐるぐるってほどいて、駐車場を下して、車を乗せてまたあがるでしょ。それで、ひもをまたここに巻くんよ」と嬉しそうに説明をする。A児は「ふーん、ひもかあ。いいじゃん」と言う。L児は喜んで他の4歳児たちに「これこうやって動かすんよ」と自信をもって言っている。

【考察】

L児は年長組の街にとっても興味をもって一人である。そのため、A児の「駐車場をつけたらいいのに」という意見に強く反応して、L児なりに考えてエレベーター式駐車場を作った。それをA児に褒められたことでL児は自信をもち、他の子にも喜んで見てもらおうとする姿につながったと考える。教師はA児の思いとL児の意欲をつなぐだけであるが、L児自身のやりたい思いにつ

ながることができたことがL児の自信につながったと考える。



図6 エレベーター式駐車場

5 実践を終えて

5歳児から受ける影響を生かす教師のかかわりを探っていったが、事例から明らかになった教師のかかわりを次に述べる。

(1) 教師が4歳児の子どもたちと一緒に行う5歳児へのかかわり

5歳児とかかわることで影響を受けるということは、かかわるきっかけが必要である。事例1の教師から5歳児への声掛け、事例1、2の教師と4歳児と一緒に5歳児へ話しかけること、事例2でドングリを転がして5歳児の遊びにかかわるきっかけを作ることなどが、5歳児とかかわるきっかけになっていると言える。また、事例3で年長組担任と連携をしておくことも4歳児が安心して5歳児にかかわるきっかけになると考える。

(2) 教師が子どもたちと一緒に遊ぶ中で、気づいてほしいことを意識的に言葉にするかかわり

事例2のガードレールがいるということ意識して言うことで、4歳児の遊びに取り入れられていった。このように意識的に言葉にすることは、遊びを広げていくために有効であると考え。しかし、子どもの遊びの状況を見極めて教師が引張ることのないように気をつけなければならない。

(3) 子ども(たち)自身がこうしたいと思っていることに共感し見守るかかわり

5歳児の影響を受けて、事例1で教師はB児の

思いに寄り添い回るタイヤの車を一緒に作ったり、事例3で子どもたちが自分たちの車のコースや街を作る姿に共感し見守っていったりした。このように、5歳児を真似てやってみようとしている子どもの思いを大事にして寄り添うことが5歳児からの影響を生かすと言える。

(4) 4歳児が自信をもてるように5歳児との橋渡しをするかかわり

事例4でのA児の思いにL児が意欲をもちエレベーター式駐車場を作った。それをまたA児に認められることでL児の自信につながった。このA児とL児の間に教師が少しだけ入り、かかわりをつないでいる。このように、5歳児の影響を生かすために、教師が両者の橋渡しをすることも必要と考えられる。

6 おわりに

4歳児の遊びが深まるきっかけとして、5歳児の「車づくりから街づくり」のクラスでの活動が終わった頃、教師は4歳児と一緒にその作品にふれることから始めた。教師がかかわるきっかけを作ることで、4歳児の遊びは深まっていったと考えられる。また、年長の影響を受けにくい活動に焦点をあててみたが、これは、4歳児にとって遊びを深めることができる大きなきっかけになったと受け止めている。5歳児にかかわることで何らかの影響を受け、それが生きるように教師がかかわる。ただし、そのときに子どもの状況をしっかりと見取り、今どうかかわりがこの子には必要かということを考えながら行っていく必要がある。今後も子どもの心もちを大事にしながら、子どもと共に歩いていく。

<参考・引用文献>

- 1) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」, p. 128, 2008, フレーベル館。